

宮崎世民回想録

宮 崎 世 民 著

青年出版社

宮崎世民回想録

宮崎世民著

青年出版社

著 者 紹 介

みや ざき せい じん
宮 崎 世 民

1901年熊本県に生まれる。1924年東京帝国大学法学部法律学科卒業。

職歴，日本中国友好協会全国本部理事長。

主要著訳書，蕭乾著・宮崎世民訳『土地農民にかえる』ハト書房。

現住所，東京都練馬区石神井台 3～1～38。

宮崎世民回想録

定価 5000円

1984年6月30日

第1刷発行

著 者	宮 崎 世 民
発 行 者	福 井 肇
印 刷 所	共 信 社 印 刷 所
製 本 所	白 信 製 本

発 行 所

東京都千代田区
神田錦町1～4
電話(291)1189

株式
会社

青年出版社

振替/東京6-49658

0023-060871-3835

自序

永遠無辺の宇宙を除いて、森羅万象ごとく、始めあれば終りがある。人類の終焉もいつかは来る。しかるに人は、自分もいずれ死を免がれないことを忘れて、生を楽しんでいる。一人が死ぬるかと思えば、他には新らしく生まれる。変化がなければ万物の、したがって人間の歴史はありえない。変化がないと倦み厭きるし、変化がありすぎると昔を思い出す。それが人生だ。

わたしは日中友好協会の仕事をやめたあと、思い出すままに追憶記を書くことにした。世に大器晩成という言葉があるが、わたしの場合は小器晩成である。なんにも知らずに、小学校、中学校、高等学校から大学にはいった。すこし世間が見えるようになってから、日中友好運動にたずさわった。この思い出にくわえて、日中関係の今昔について、いくつかの感想を綴った。

書くいじょう、ひとりでも多くの人びとに読んで貰いたいと思い、ある友人に相談したところ、「あなたの思い出なら売れましょう。お手伝いしてもよろしい」といい、別の友人は、「現在の中国に批評がましいことを書くことは無用。なぜなら中国人は、そんなものは読まなくても、自分でよく承知している」と助言してくれた。

しかし、わたしが多少とも知っているいまの中国社会では、いくら言論の自由があるといっても、誰れかが初めに口に出さないと、多数の人の心にあふれる糸口の言葉にならない。また内部ではわかっていても、それは短視的であって、わたしのように遠くはなれた外国から見れば、巨視的になる。魯迅がいうように顕微鏡は望遠鏡のかわりにはならない。そこでわたしは、望遠鏡で見た中国について思うことを述べることにした。とはいえ、これも群盲象をなぜ

るの類かもしれないが。

ともあれ、わたしは全編を、日中友好の真心をもって書き綴ったつもりである。外国の友人としての直言をも含めて、日本の読者はもとより、中国人のためにも、いくらか参考になれば仕合わせである。

わたしには、二、三十年まえに蕭乾氏が、中国の土地改革をルポルタージュ式に書いたものの翻訳書と、ときおり新聞に寄稿した時事問題に関する文章はあるが、自分の著書というものがひとつもない。この『宮崎世民回想録』は、青年出版社の福井肇さんに助けてもらわなければ、日の目を見ることはできなかった。ここに特筆して感謝の意を表する。

一九八四年三月

著 者

目次

自序	1
----	---

第一部 奇人伝	13
---------	----

第一章 熊本の春秋	15
-----------	----

(一) わが故郷	15
----------	----

宮崎の家	15
------	----

「官の飯 めし を食ってはならぬ」	17
----------------------------------	----

祖母のこと	17
-------	----

銀行よりも安心	18
---------	----

宮崎家の系譜	18
--------	----

訪れた人びと	21
--------	----

(二) 大逆事件で家宅搜索	21
---------------	----

一九一〇年夏	21
--------	----

傲慢無礼	22
------	----

経節、検事局、訓示	23
-----------	----

叱かられて	24
-------	----

(一)	孫中山先生の来訪	25
(二)	月田蒙齊先生	27
	父の話し	27
	信念の人	27
	菊地武光の故事	28
(三)	わたしの中学時代	29
	すべては神秘	29
	玉名中学校に入学	29
	寄宿舎生活	30
	楽しい思い出	31
	数学ずきの中学生	32
(四)	五高の青春	33
	目白に寄寓	33
	蕎麦の花咲く「龍南」	33
	お巡りさんを挑発した咄し	35
	ボートで有明海を横断	36
	さらば熊本	37
(五)	第二章 大学から社会へ	39
(六)	銀杏の蔭の学生生活	39

はじまった東京生活	39
男子の一生をかける学問ではない	40
兄弟 あにじや ひと	42
天の橋立	43
関東大震災	44
(二) 父の思い出	46
父と彌蔵、寅蔵叔父にとっての中国	46
人生の大憂問題	47
父の土地復権運動	48
父と共産主義	53
謹厳己れを持する	55
(三) 社会人として門出	57
保険会社の職員	57
ある外務員の死	59
召集令状	60
(四) 切除すべき人生の一部	61
内地勤務	61
大陸へ	62
除隊	64

(五) 敗戦のあとさき 66

ふたたび上海へ 66

日本の敗北 67

満開の八重桜のもとで 69

第三章 日中友好協会時代——その一

.....73

(一) 協会の草創期 73

生き甲斐 73

運動と生活 75

第二の結婚 76

人と金 77

占領軍時代の日中友好運動への弾圧 79

内山さんと喧嘩したこと 81

(二) 在華邦人・華僑・戦犯の帰国援助 83

歓喜した国民 83

池田正之輔という先生 87

松本さんのビザ 89

三団体代表の権威 90

天津か香港か 90

(三) 漁業協定の締結と継続 92

銃を撃っても魚は獲れぬ 92

気づかなかった政治三原則 93

鞘あて 95

痛快^{トシクワイ} 97

(四) 思い出の人びと 100

忘れられない毛沢東主席の姿 100

私心のない周恩来総理 101

人気のある朱徳將軍 101

当意即妙の宋慶齡女史 102

懐かしい何香凝女史 103

李徳全女史 103

魅力ある金日成首相 104

(五) 三十年来の戦友・廖承志さん 105

嗚呼^{ああ}廖さん^{ああ} 105

廖さんと知りあったころ 106

廖さんに叱かれた咄し 107

賠償問題 108

青年大交流のこと 109

父廖仲愷の暗殺者 109

第四章 日中友好協会時代——その二

(一) 理事長としての十七年 111

仕事の数かず 111

左を向けば 112

右を向けば 112

(二) 六〇年安保のころ 114

中断から再開へ 114

どちらが奇人か 115

(三) 騒然たる文化大革命 119

「日共」との訣別 119

目的と手段 120

文革とわたし 124

文革と日中友好運動 129

一場の喜劇 133

(四) 分裂そして団結 134

三・一五事件 134

成就した団結 136

(五) 大転換の年代 148

日中国交回復す 148

第二部

奇人の奇語

..... 193

第一章

中国への直言

..... 195

始めあれば終りあり 195

歴史発展の法則 196

——中国は付合いやすくなったか——

解けない疑問 197

片言隻句 199

文革から現代化へ 200

哲学雑想 201

(六)

新時代の日中友好

162

『日中国交回復は人民の力で』 149
台湾は中国領土の不可分の一部 151

直接かつ具体的な友好？ 162

毛沢東主席を憶う 163

「貿易白書」の顛末 168

残された生家 184

協会の私物化 187

和すればともに栄える 189

第二章 日本への直言

社会主義と資本主義	207
物質的刺戟の問題について	210
現代化のなかでも社会主義の大方向を忘れずに	214
史的唯物論と社会主義の優位性について	216
いわゆる「革命的模範劇」はなぜ面白くないか	218
さいきんの中国の政治傾向について	219
経済重視の危険	225
「革命後の社会」はいかにあるべきか	227
実事求是とは	229
中国はどこへゆくか	232
「建国いらいの党の若干の歴史的問題についての決議」を読んで	239
辛亥革命と共産主義革命	241
毛沢東と毛沢東思想	246
統社会主義と資本主義	247
利己心の問題	250
統利己心の問題	253

日本社会の特徴	256
金力万能社会	259
総評の物価春闘を支持する	260
二つの道中風景	262
カンボジア国際会議日本組織委員会に出席して	263
グリーンカード制について	264
国防費は経済界が負担すべきである	265
勝てば官軍	266

第一部 奇人伝

